

特集2 被ばく労働と原発再稼働



汚染水漏れと被ばく労働

なすび

オリンピック招致と頻発する現場事故

2013年9月7日にブエノスアイレスで開催されたIOC総会で「状況はコントロールされている」「汚染水は完全にブロックされている」と耳を疑うような発言をした安倍首相は、9月19日にフクイチ（福島第1原子力



発電所）の現場を訪れ「汚染水問題を早く何とかしろ」と東電（東京電力）に圧力をかけたと言われている。この安倍訪問の直後、9月27日から10

月20日までの3週間に、それまでは考えられなかったような初歩的なミスによるトラブルが現場で7件も発生しました。

9月27日に試運転を開始したばかりのALPS（アルプス、多核種除去設備）C系統は、設備内部に置き忘れた作業用のゴムシートが汚染水の流れるパイプの出口をふさいだため緊急停止しました。10月1日には汚水タンクを囲む堰に溜まった水の移送先を間違えて4トンの汚染水が構内に溢れ出しました。2日はタンクが地盤沈下で傾いていたため、同じく堰に溜まった汚染水が移送先タンクから溢れ出しました。7日はとんでもない話で、原子炉1号機の冷却用の注水ポンプの停止ボタンを間違えて押して止めてしまったということです。9日は淡水化装置の配管取り替え工事中、作業をする配管を間違えて接続部のロックを外して汚染水が大量に噴出、この水を浴びて6人の作業員が被ばくをしました。

2013年2月にはフクイチの湾内で、74万Bq（ベクレル）という高度に汚染されたアイナメが獲れました。明らかに海は汚染されています。環境汚染を心配する市民、食品汚染に不安を抱く消費者、風評被害を懸念する農家や漁業の方たち、誰にとっても汚染水問題は大きな問題です。しかし安倍が言おうと原発の立場の市民が言おうと「汚染水を何とかしろ」と言うだけでは、現場の人たちにとっては、結局ある種の圧力でしかありません。

「被ばく労働をさせるな」といっても、原発の作業は彼らの生活の糧であり、フクイチをいまのまま放置できない以上、何らかの被ばく労働を伴わざるを得ない廃炉作業を誰かが担わなくてはならないことも明らかです。どうすればよくたちの言葉が、労働者と共に何かを変えて行く表現になるのか、と考えざるをえません。

汚染水タンクと被ばく労働

汚染水漏れが問題になっているタンクはフランジ型といわれ、周囲の板にパッキングを挟んでボルト締めしたものです。またもともと地下水の多い軟弱な地盤なため、地震によつて各所で地盤沈下も起こしています。つまり、問題は1つ2つのタンクの話ではなく、全部で930基あるというすべてのタンクに共通した構造的な問題なのです。汚染水漏えいを受けてタンクの周りに急ぎょ堰を設置しましたが、その高さは30cmしかなく、台風や大雨のたびに堰の汚染水が溢れ出しています。冒頭の写真は大雨時の夜間作業の様子です。普通、原発の作業場ではどんなことがあっても水だけには触れてはいけなと言われてきたのです。しかしこうなると、雨だか汚染水だかもう分からない状態です。

タンク漏えい発覚後、巡回員を従来の2人から50人に増やしてタンクの巡回点検をするとともに、漏えい箇所はボルトで増し締めし、ひび割れはコーキング材ですき間を埋めて補

修しています。汚染水が漏れてしまった堰の中は、水をかけてデッキブラシで洗い流して除染をしているそうです。

「本物」の汚染水を使った試運転

汚染水の流出を防ぐため、現在、海側で地盤改良工事を行っています。また原子炉建屋を囲む凍土遮水壁工事も予定されています。凍土壁の是非の議論はともかく、軟弱な地質の地盤工事では、汚染された地下水に触れる危険が絶えずあります。そうした被ばくから身を守るため、仮にかっぱを二重に着るとか、手袋を三重にしたとしても、そんな恰好で土木作業することは現実的には無理です。

いま汚染水は油と塩分、それに3基のセシウム吸着装置を通してセシウムを除去して、原子炉建屋内の圧力容器に冷却水として注入しています。セシウムを取ると言っても完全に取れるわけではありませんし、セシウムを吸着した危険な大量の放射性廃棄物が別に生産されています。キュリオン社製セシウム吸着装置が動き出した直後の2011年6月、この処理システムのモニター線量が最大で毎時11ミリSv（シーベルト）となり、大問題になりました。また2ヵ月後に入れた東芝のサリイは動き出してすぐ、配管の一部で今度は毎時3Svを観測したのです。3Svとは、2時間くらいの被ばくで人が死んでしまう程の大きな線量です。処理施設の周りで働いている人たちは、通常でも毎時数ミリSv単位という

ものすごく高い放射線量に晒された環境で働いているということです。

セシウム以外のストロンチウム等92種類の放射線物質を取り除く目的で、ALPSという装置の導入を新たに図っています。しかしこのALPSは試作品をそのまま入れてしまった感じなのです。2013年3月から始まったA系統の試運転では、「タッチペンによる操作画面タッチで行なっていたが、タッチペン先が太いことから隣ボタンをタッチしてしまった（東電のプレス向け説明文書）」ために4月には止まってしまいました。また同年6月に起きたタンク漏水を測ったところ、「セシウム134・1900Bq/l・セシウム137・3900Bq/l・全ベータ各種・670万Bq/l（同説明文書）」であつたというのです。セシウム除去装置を通した後なので相対的にセシウムは少ないのですが、それでも1リットルあたり2000とか4000Bqあるわけです（編注／日本の食品に対する1kgあたりのベクレル上限値（2012年4月現在）は、一般食品100Bq、牛乳50Bq、飲料水10Bq）。こういう水が設備の中を絶えず流れ、漏れ出したりしているわけです。取り敢えずテスト運転をしてみて、途中で開放点検などしながら不具合が出たら、その都度現場で手直ししつつ使えるようにしていきましょう、という段階です。でも、すでにラインの中は「本物」の汚染水がどんどん流れているわけです。そういう場所で作業をさせられているわけです。

被ばく労働の実態把握と作業基準づくり

4号機の使用済み燃料プールにある燃料の取り出しが始まりました。燃料プールにある燃料を水中で保管容器に入れて取り出し、共用プールに移送して保管するのです。燃料プールの水は高濃度の放射能で汚染されていますから、プールから取り出したところで保管容器の除染をしますが、何故かその具体的な作業工程の説明がありません。不審に思った記者が記者会見で、除染の具体的方法を聞いたら「ウェスで拭きます」との回答でした。ぼくたちは被ばく労働を問題視する中で、具体的な作業を知り、その危険性を把握したうえで、何をやるべきか、あるいはどういうことをしてはいけないか、ということを経験的に提起すべきではないかと思っています。除染や廃炉の作業が避けられないとしたら、きちんと労働者が現場のインシニアティブをとれるような組織を要求するような運動に取り組むべきではないかと思っています。

（なすび／山谷労働者福祉会館。被ばく労働を考えるネットワーク。写真提供も筆者）

本稿は、2013年11月30日開催の福島原発事故緊急会議主催シンポジウム「デマにまみれた安倍政権の原発再稼働暴走を許すな」なすび氏講演録の抜粋です。講演の全文は同「シンポジウム講演録No.4」（近日発刊予定）に掲載されています（頒価500円＋送料80円）。入手希望の方は「福島原発事故緊急会議」FAX: 03-6424-5749 メール: office@2011.shinsai.info までお申し込み下さい。